

職人の技「ヨリコづくり」

愛知県立常滑高等学校

セラミックアーツ科 実習教師 都築信雄

1 はじめに

常滑は2005年に中部国際空港（セントレア）が開港し、世界とのつながりも出来、知名度の向上により、地場産業である陶業・漁業・農業・観光業に一層目が向けられ、注目を浴びています。その中の陶業は、土管・タイル・植木鉢等の産業、急須・花器・置物の伝統品が厳しい経営状態になっています。日本六古窯の一つである常滑焼はものづくりの継承が今、現在まで脈々と続いている、職人の技「ヨリコづくり」を紹介します。

2 常滑焼の歴史

平安時代末期（12世紀）には常滑を中心にして知多半島の丘陵地のほぼ全部の地域に窖窯が築かれ、山茶碗・山皿・壺などが作られた。地層は常滑層群（第三紀鮮新世）で粘土層と砂層が重なった地層である。焼き物の種類も片口鉢・三筋壺・経塚壺・大甕などたくさんあり、特に、大形のものを特長としていた。

その後、室町時代に入ると、「窯」は常滑地方に集まってきて、生産品も大形のものが殆ど占めていた。それらの大形の甕・壺は舟（海運）で遠く東北地方を始め、関東から九州まで運ばれていた。窯も地下式の窖窯から半地下式の大窯に改良され、製品は褐色の自然釉の真焼け、赤物と呼ばれた素焼きの甕を始めとする日用雑器が多くなった。

江戸時代の終わりには、連房式登窯が現れ真焼けや素焼きの土管・甕・朱泥製品（茶器・酒器・火鉢など）が加わった。

明治時代になって、それまで山の斜面に築かれていた窯が平地に築かれるようになり、窯もさらに改良されて倒炎式角窯が使われるようになった。陶器にも釉薬を掛けたものが多くなり、食塩釉も出現し、土管・焼酎瓶・建築用陶器・衛生陶器も作られるようになり、燃料も薪に代わって、石炭・重油が使われるようになった。そして製品の種類も生産量も一層増加して、近代産業に仲間入り、技術は急速に進歩し、機械による大量生産もはじまり、製品の種類・質・生産額も飛躍的に伸びて現在に至っている。

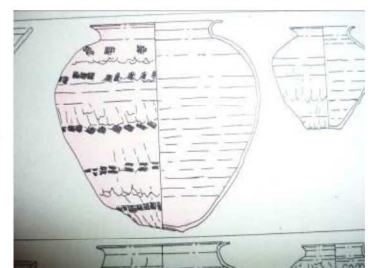
3 「ヨリコづくり」 ～甕の製作～

知多半島や渥美半島の古窯においては、甕・壺など、大形の製品を仕上げるのにロクロを使用していない。粘土を紐状にして順次に輪づみにしていく方法で制作している。

腹径や器高が80cmもあるような大形製品を作る場合、粘土が柔らかくは、制作の途中でつぶれてしまう関係から、輪づみの場合も全体を一気に仕上げてしまうけにはいかない。2段から3段積み上げては、崩れない程度の半乾きになり、土が硬くなるまで一兩日の間そのままにしておいて、次の段を積み上げていくというような工程をかさねている。

そして粘土の輪と輪の継ぎ目の接着を確実にするためにいろいろの工夫がなされ、工程の間の継ぎ目の面には、水を湿した布をかぶせたのは言うまでもないが、新しい段を積むに当たっては、継ぎ目の外側には押型をあてがい、両手でつぶすようにして密着させている。この場合の押型に刻み込まれた文様が写ったものが、甕の表面に残った押印文様である。

平安時代の後期のものは、特に器壁が薄く仕上げられているが、ところが鎌倉時代の中期になると、大量生産の必要性から、手間を省くために器壁を厚くし、数段重ねてから輪づみするなど、輪づみの作業の工程回数を少なくし、できる限り成形日



数を短縮している。時代が下るにつれて、甕の器壁が厚くなっているのは、工程の短縮により効率を上げて、大量生産の需要に応えたという理由からである。

現在、こうした粘土の輪づみ技法は、「紐づくり」とよばれる特殊なテクニックとして継承されており、常滑地方全体でも数人の人によってのみ、伝統が守られているものである。粘土の紐といっても、太さが径10cmほどもある棒のようなものであり、これを手の先から腕さらに肩まで、かついだりしながら、自分自身が制作物の外側を、何回も後ずさりをしながら廻って積み上げていく方法（人間ロクロ）であり、作業自体も重労働である。さきに粘土の紐を「ヨリコ」と呼んでいた。そしてこの技法を「ヨリコづくり」とも呼んでいた。ヨリコの大きさについては、製品の規模によってことなると前提し、長さは肩に掛ける程度であり、太さは大きい手で持つことができるということで、10cm程度が最大であろう。甕の制作で工具らしい工具はほとんど使っていない。しいてあげればカワツギと呼んでいる木綿の布地である。工具がないことも常滑窯業の特色である。



カメツクリリタカゲタ



カメツクリブタイの上での仕事



4 「あいち技能マイスター」

(1) 趣旨

・愛知県では産業の発展を担う優れた技能を維持・継承して、モノづくり人材を確保・育成していくためには、広く県民がモノづくりに対する技能の必要性・重要性について理解を深め、技能や熟練技能者が尊重される社会を形成していく必要がある。

このため、愛知県では、子供の憧れや若者の目標となるような優れた技能を持つ人を「あいち技能マイスター」として認定している。

(2) 「あいち技能マイスター」の種類

・技能の匠（13人「企業系7名、生産系6名」）

卓越した技能を持つとともに、技能の表現、伝達能力に優れた方

・伝統工芸の匠（3人）

伝統工芸士で、伝統への深い造詣や、技能の表現、伝達能力に優れた方

・人づくりの匠（1人）

企業内の人材育成に特に顕著な功績を持つ経営者等

(3) 前川賢吾氏について

1947 常滑市に生まれる

1994 伝統工芸士認定

2004 中部国際空港（セントレア）に大型プランター納入

- 2007 あいち技能マイスターに認定される
2010 とこなめ焼陶業振興展内閣総理大臣賞受賞
2013 常滑市指定無形文化財常滑焼工法「大物ヨリコ造り」認定
伊勢神宮式年遷宮に甕を納めた

(4) 常滑高校にて実演

(ア) 職人の技「ヨリコづくり」生徒にビデオを見せ、実際に実演し指導してもらおう。生徒が傘立てを制作し、一人ひとりに制作指導をしてもらう。

(イ) 生徒の感想

- ・伝統工芸は、奥深いと思った。前川さんにもっと教えて頂きたかった。
- ・ヨリコづくりの作り方の手順が分かった。出来栄はよくないけど完成してよかった。
- ・今まで作ったことのない大きな傘立てを作りましたが、実際に生徒が作る作品に手を加えて指導してくださったのでわかり易かった。
- ・最初はできずに苦労しましたが、前川さんが作っている姿を見たり、コツを教えてもらいできるようになったので、最後は楽しく終わることができた。また、機会があったらヨリコづくりをやりたいと思いました。
- ・大物作品は、初めて作りましたが指導された少しずつ上達していったのでうれしかったです。自分の作品づくりをする上で役に立つと思います。



5 おわりに

高校時代に発掘のお手伝いをさせていただき、窯から出土する品物は破片が多く、特に甕の大きな破片に驚きどんな大きな甕か想像しました。ロマンを感じ、夢を持つ事が出来、楽しみでした。

日本人のものづくりは世界に「メイド イン ジャパン」と知られ、注目を浴びています。先人からの技を今見直し、後世に途切れることなく継承され、発展していくことを期待します。若者にエールを！

参考文献 「常滑窯」 杉崎章・村田正雄著